

皆さんお元気ですか。

2017年4月の出来事を綴っています。ご笑覧くださいませ。



4月22日、合気道の生徒から「ナカタマル」を貰った。これは、ニカラグアの名物料理だ。今までにも何回か食べたことがあるが、あまりおいしくなかった。今回は、ある生徒がお母さんと一緒に作ったと言って持ってきてくれたので、しぶしぶ頂いた感じだ。しかし、食べてみたら、これはいける、おいしい、と感じた。今までの「ナカタマル」とはチョッと違う。この味は、日本の食べ物に例えるには難しいが、スパゲティにかけるミートソースのような味だ？ レシピは、トウモロコシの粉、牛肉、じゃがいも、トマト、玉ねぎ、唐辛子、塩、酢、ラード、にんにくなどと作った本人が説明してくれた。これをバナナの皮に包んで、三時間以上茹でるそうだ。「ナカタマル」を食べると「お腹に溜まる」から、「おナカ タマル」と言うんだ、とある日本人が冗談を言っていたが、本当に食べるとお腹が張る感じだ。しかし、コーヒーと一緒に飲むと何だかお腹がすーうとするような感じになる。「ナカタマル」は作られる家庭によってもずいぶんと味が違うんだと実感した。



4月24日、ミスティーンインターナショナルコンテストがニカラグア日本友好公園で開催された。このコンテストがニカラグアで開催されるのは、初めてのことで、と生徒のひとりが言っていた。どおりで、今日は大ホールも小ホールも使えないのか。そしてやけに当公園の清掃人たちが一生懸命にホールを掃除していた理由が分かった。ミスティーンのコンテストと聞いたので、気になって稽古が終わった後、会場を覗いてみた。ミスティーンを見たとき、本当にこの女性たちは10代なのかと疑った。この女性たちの体形には目をみはるものがある。高いハイヒールを履いているが、身長は全員185cm以上あるかな。りかちゃん人形がそのまま人間になったような体型。ほぼ全員が、白人系。アジアからは、インド人とフィリピン人を見ただけで、中国系の人はいなかった。カメラをむけると必ず微笑みながらポーズを取る。誰一人として嫌な顔をする人はいない。控えめで恥ずかしそうにしている人は誰もいなかった。ミスインターナショナルになるような人はやっぱりどこが普通の人とは違うなあと感じた。



コンテストのオープニングは、鮮やかな民族衣装を着たニカラグア人の踊りからはじまった。このコンテストに合わせて、10代の女性が踊っているのだとすぐに分かったが、ミスユニバースは、どう見ても10代とは感じられない。ダンサーを見ていて、ニカラグア人も綺麗な人が多いとつくづく感じた。しかし、美しさの基準がミスユニバースとは違うのだなあ。今回の美しさの基準を自分目線でいうと、やっぱりニカラグア人のほうがきれいだ。顔だちやスタイルではなく、内面的な美しさがある、素朴さがある。今回のコンテストは、どのような人が審査するのだろうか。このコンテストには、ニカラグア人は見当たらなかった。審査員は、キッと富裕層の人たちだろう。そして、コンテストに選ばれる女性も当然、富裕層の家庭で育ったんだろうなあ。いつかこのコンテストにニカラグア人が選ばれるといいなあ。でも、日本人の10代がこのコンテストに選ばれるのは、そうとう先かもしれないと同時に思った。



美人コンテストの翌々日（4月26日）公園内で遊ぶ14、15歳のティーンエイジにたまたま会った。彼女たちは、WiFiが使えるこの公園にきて遊んでいるとのこと。快くカメラに応じてくれる。少女らしさとあどけなさを感じる。3人の女子の列に、男子が挟まっている様子が何やら小学校の低学年のようにも見える。でもこういう子供たちは、あっという間に大人っぽく、女っぽくなっていくように思う。ある日本人が言っていたけど、こちらの10代は早熟で、妊娠をする人も多くて、20代後半になると太ってきて、綺麗さは劣ってくると。全般に言えることは、女性のほうが男性に比べて、しっかりして働き者だと思う。合気道の生徒にもよく生徒の家族構成を聞くが、大抵父親はその家族と同居してなくて、祖父母か兄弟、姉妹、義兄弟で、大家族だ。家族を支えているのは、母親か祖母かである。男性たちは、どこにいるのか、と不思議な社会である。

